

2.7 県民向けシナリオ

山梨県内のいくつかの代表的な場所・状況を設定して、東海地震が発生した場合における被害様相等について県民の視点で物語風に表現した。本シナリオの設定場所・状況としては、古くからの老朽木造住宅にいた場合、観光地にいた場合、山間地にいた場合及び東海地震関連情報が発令された場合である。

(1) 古くからの老朽木造住宅にいた場合

私の住んでいる家は昭和 30 年代に建てたものであり、周りの家もそれ以上前に建てられたものばかりの古くからの市街地にある。私の家族は 70 歳になる両親に、妻と、高校生になる息子と娘である。私は普通のサラリーマンで、この日も日頃と変わりのない 1 日を過ごすはずだった。朝 6 時に起きて、家族みんなで朝食を食べ、それから会社に行き、一生懸命働き、そして疲れて夜に帰宅するという何気ない普通の生活。それが今思えば懐かしく幸せな生活だったとつくづく思われる。

去る 2004 年は 10 月 23 日に新潟県中越地震が起こり、年末にはインド洋沿岸でスマトラ沖大津波による未曾有の災害が発生した。特に新潟県は山梨県とも似たような特徴の地域であり、新潟県中越地震のような地震が山梨県で起こったらどうなるかと心配に思ったものだが、時が経つにつれて地震への恐怖や地震に対する備えについての気持ちなど薄れていった。自分の家が古いことはわかっており、もし大きな地震が起きたらひどい被害になるなど日頃から感じており、「耐震診断や耐震補強はいつか必要だろうな。寝室や台所にも地震時にいかにも危険そうな家具や食器棚があるし、転倒防止器具も付けなきゃなあ。」と思ってはいたのだが、日頃の生活の忙しさもあり、ついつい疎かにしてしまった。「あの時、家具の固定などの簡単な対策だけでもしておけば、あるいは寝室などには家具を置かないようにしておくなどしておけば、両親を亡くすこともなかったのに・・・。」と悔やまれてならない。

あの日は雪がちらつく肌寒い早朝だった。まだ夜明け前でみんな目覚めていない 4 時過ぎだった。突然大きな揺れに見舞われた。大きな揺れになる前にズズズと何か地響きがするような感覚があったような気もするが、寝ていたこともあり、まさに突然大きな揺れが起こったという印象であった。揺れ幅の大きな激しい揺れが 1 分以上は続いただろうか。テレビは台から落ち、室内の何から何までが落下し散乱した。ミシミシミと家の壁や柱が唸り、今にも倒壊しそうで、感じたこともない生命の危機への恐怖を感じた。妻は、布団の中で私にひたすらしがみついた。窓ガラスが割れ、飛散したガラスが降ってきたが、幸い布団がカバーしてくれた。私の寝室には家具などの大きなものは置いておらず、14 インチの小さなテレビが落下した以外は小物が落下・飛散したくらいで怪我をするような大きな被害はなかったが、布団の周りはガラス等の散乱物で足の踏み場もなかった。阪神・淡路大震災の教訓として、布団の近くにはスリッパや非常持出品

を準備するなどが重要であるとは聞いていたものの、実際の準備まではしていなかった。

揺れが収まり、我に返って、ふと、両親や子どもたちの安否が気にかかった。停電¹により真っ暗でほとんど見えない中で、布団を踏み台にして部屋の扉のところまで行き、廊下へ出ようとしたが、なかなか扉が開けられなかった。激しい揺れによって家の構造が傾いたようだ（家は倒壊することはなかったが、大きく傾き、後に全壊²と判定された）。何とか扉を開けて、急いで両親や子どもたちのところへ向かった。

廊下に出たところ、子どもたちも出てきており、彼らの無事がわかってほっとした。私たちのいる2階から1階廊下に降りてみたが、そこには両親の姿はなかった。1階の廊下も飛散ガラスで足の踏み場もなかった。家が傾いたせいか、廊下の空間も狭く感じた。両親の寝ていた部屋も扉がなかなか開けられず、息子が蹴破って中に入ったが、そこで私たちが見た光景はひどいものだった。タンスやテレビなどのあらゆるものが、両親が寝ていたと思われる布団の上に倒れ込んでいた。「お父さん！お母さん！」と声を掛けたが、二人からは何の返事もなかった。私は息子と協力して家具やテレビを持ち上げたが、その下からは、もう既に息をすることもなくなった両親が横たわっていた。父はとっさに母を助けようとしたのか、覆い被さった状態で押しつぶされていた。ほぼ即死の状態であった³。それでも、私たちは119番に電話をして助けを求めようとしたが、他にも多くの方が通報しているのか、つながることはなかった。

夜が明けて被害の様子を目で確かめられるようになり、被害の全貌が見えてきたが、それはひどい有様であった。近所においても多くの方が負傷したようだ。建物が倒壊し生き埋めになった人も大勢発生した。私は一応地元の自主防災組織に入っており、年1回実施する訓練では消火訓練、救助訓練、応急手当訓練などを実施しており、阪神・淡路大震災では生き埋め者の8割を近隣住民が救助したことから自主防災組織をはじめとした住民の災害時の役割は非常に大きいと感じていた。実際、今回の地震でも自主防災組織を中心に救助活動が活発に行われたらしい。しかし、私は、この地震で両親を一度に亡くしたというあまりのショックに打ちひしがれていて、防災活動に加わることはできなかった。そんな中で、近所の人たちは、私たちに声を掛けてくれ、両親の医療機関への搬送や身の回りの世話などをしてくれた。日頃からの近所づきあいが災害時に大きな役割を果たすことを感じた一方で、平常時に潜む弱い部分に災害時の被害は集中することも痛感した。

今回発生した地震は後に東海地震であるとわかり、静岡県を中心に7,000人を超える死者が発生し、山梨県でも約370人の死者が発生したらしい。新潟県中越地震では、阪神・淡路大震災と比べると大きな被害は発生しなかったが、今回の地震は阪神・淡路大震災を超える大惨事であり、建物の倒壊や家具の転倒、斜面崩壊、そして静岡県などの沿岸部では津波によって多くの方が亡くなった。「災害は忘れた頃にやってくる。しかし、必ずやってくる。日頃からの地道な備えが災

¹ 停電率は、県全体で約35%。

² 揺れ・液状化による建物被害は、山梨県全体で全壊約6,900棟、半壊約3万1千棟。

³ 朝5時発災ケースでの人的被害は、県全体で死者約370人、重傷者約670人、軽傷者約5,400人。建物倒壊等による要救助者は約1,950人。

害時に効果を発揮する。どんな簡単なことでもいいから自分たちにやれることはしっかりとこつこつとやっておくべきであった。」と今更ながらに痛感した地震であった。

今、私たちは避難所で生活をしている。地震から1週間が経過したところである。自宅建物が被害を受けたせいだが、他にも大きな余震が発生していることへの不安や断水などのライフライン支障を理由に避難所生活をしている人もいる⁴。自宅近くのこの避難所は被害がなかったが、中には被害を受けた避難所もあった。阪神・淡路大震災や新潟県中越地震では、慣れない避難生活で病気を患ったり悪化させたりするなどにより死亡する人が発生したが、こうした教訓をもとに避難所においてもきめ細やかな医療ケア体制が組まれているようだ。車中泊をする人も何人かいるが、それらの人への巡回ケアもなされている。震災当日には食料・飲料水等物資が不足することがあったが、震災時には交通が混乱し流通もうまく機能しないので、日頃から言われていたように家庭内に非常持ちだし食料を備蓄しておけば何とかな問題ではなかったかと感じている。今欲しい物資や情報がなかなか入手できないということはあるが、それより、今一番困っているのはトイレである。断水状態が続く中で避難所の水洗トイレはうまく使えていない。特に女性は困っている様子である。中にはトイレにできるだけ行かないようにと、水や食べ物を摂らずにいる人もいる。新潟県中越地震では、こうしたトイレ問題が間接的に影響して、水分を摂らないことがエコノミークラス症候群を引き起こしたのではないとも言われている。昨日からやっと仮設トイレが配置されるようになったが、それまでは学校のグラウンドに穴を掘って臨時のトイレを作り対応していた。今後も、し尿処理回収の遅れなどが心配される。また、避難所におけるプライバシー確保も問題になっている。娘も避難所で一緒に寝起きしているが、年頃のせいもあり、他人の視線などが非常に気になるらしい。まだ何日かは慣れない避難所生活が続けざるをえないだろうと予想される中で、避難所のリーダーを中心に一緒に協力をしながら、私たち避難所生活者自らが暮らしやすい運営をしていかないといけないと感じている。

(2) 観光地にいた場合

ジェットコースターに乗りたいという小学生の息子の希望と、森林浴がしたいという妻の希望を同時にかなえるべく、今年の夏休みは家族で河口湖近くのペンションで過ごすことにした。

昨日は、遊園地でジェットコースターに乗って、家族そろって絶叫したが、今日のはのんびりとした一日を過ごすことにした。ペンションから車で10分ほど離れたポート乗り場まで自家用車で行き、午前中は湖の上でゆっくりとしていた。青空の下、富士山が間近に見え、その迫力には圧倒された。昼になったので、ポートを湖岸に戻し、近くのレストランで昼食をとった後、近くの山にハイキングに行くことにした。

水とメニューが出され、子供に「何を食べたい?」と聞いていた時、大きな揺れを感じた。揺れはすぐに激しいものになり、ガシャンガシャンと食器やガラスの割れる音が聞こえた。慌てて

⁴ 自宅建物等の被害やライフライン機能支障等による発災1日後の住居制約者は、県全体で約10万9千人。1週間後は約6万人。

妻、息子ともどもテーブルの下にもぐり込み、その長く感じられた揺れが収まるのを待った。

揺れが収まりテーブルの下から出てみると、レストラン内の各テーブルの上にあった食器やカップ、灰皿などがすべて床に落ちていた。ただテーブル自体は床に固定されていたため、テーブルだけ整然と並んでいた。ガラスの破片で傷を負った人も客もいるようだが、幸いこのレストランで大怪我を負った人はいないようだ。

しかし、これは非常に大きな地震だった。残念だけれど、もう旅行はやめて帰宅するべきだろうかと思った。妻と相談し、とりあえずはペンションに戻って様子を見ることに決めた。そして、ペンションの方面に向かったのはいいが、道路はすぐに渋滞してしまった。信号の止まった交差点があり、渋滞を激しくしている。周囲を見渡すと、あちこちの家で瓦が落ち、中には建物が崩れかかっているものもあるようだ。普段は車の中ではCDを聴くことが多いのだが、さすがに地震の状況を知りたくてラジオを聴いてみる。以前から話には聞いたことのある東海地震という巨大地震が発生したらしいことがわかった。各地の被災状況を伝えているが、まだあまり情報が入ってきていない。

この辺の被害状況は特に伝えられなかった。分かったのは高速道路や主要国道での一般車両の通行が規制されているということである⁵。そうなるとすぐに自宅に帰るのは難しいだろう。ペンションで過ごせない場合どうすればよいのだろう。どこか避難所を紹介してもらえるのだろうか。トイレで用を足そうと途中で寄った公園では車が多く駐車していた。その一人に尋ねてみると、日帰りの予定だったが通れる道がないので、公園に車で寝泊りすることにしたというが、食事や水が心配だという⁶。また、どこのガソリンスタンドも一杯であり、給油もできないのではないかと話であった。

私たちもかなりの時間を経過してようやくペンション村に戻った。その頃には被災状況がだいぶわかってきた。私たちのいる山梨県南部も震度6弱～6強の揺れが観測され、多くの死傷者が発生しているようだという。私たちが泊まっていたペンションはというと、外観は無事だった。しかし、明かりがついておらず、割れている窓もある。中を覗いてみると、オーナーが一部の客たちの協力のもと、食器類が散乱したキッチンの片づけをおこなっていた。もうだいぶ片付けは済んでいる。私たちの姿を見て、無事を喜んでくれた。今日中に帰って来ない宿泊客については一応警察に届けようと思っているとのことであった。

私たちの宿泊している部屋に戻ってみると、幸い、ほとんど落下するようなものがなかったおかげで、片付けもすぐに済む状態であった。

今日のところはここで宿泊するとして、明日も高速道路や国道が使えないようならどうすればよいのだろう。オーナーに相談してみたところ、営業は中止せざるを得ないが、宿泊している方については帰れるまで今の部屋を使用して結構とのことであった。とりあえず寝泊りできる場所

⁵ 高速道路の耐震化は進んでいるが、土砂崩れ等により通行止めになる可能性はある。また、緊急車両の通行が優先されることから、一般車両に対しては流入制限が続く可能性がある。

⁶ 8月の場合、富士吉田・河口湖・三ヶ峠周辺だけで18,000人以上の旅客の帰宅困難が予想され、県合計では約11万9千人の旅客の滞留・帰宅困難が予想される。

があるだけでも大変助かった。ただ、食事については、毎日仕入れを行っているので、明日の昼までの分しかなく、その後は避難所ですられる食事に頼らざるをえないだろうとのことであった。観光客の分も見込んで食事は確保されているのか心配になって聞いてみたが、オーナーもその点は分からないということだった。住民分の食事しか備蓄されていないのなら、このような観光客の多い地域では、しばらくは十分な食事にありつけないかも知れない。今日の午後のハイキング用にして、リュックに詰めおいたチョコレートやスナック菓子、ペットボトルの水が今となっては貴重なものとなった。

その日は、ろうそくの明かりのもと、オーナー夫婦と他の宿泊客たちと共に食事をとった。都市ガスを使わずガスボンベを利用しているため、調理に支障がなかったのは幸いだった。実家の親にはこちらに来ることを言ってあったので、心配しているかもしれない。念のため、無事を伝えようとしたが、電話はつながらない。ラジオで聞いたNTT災害用伝言ダイヤル171に無事であることを伝言しておいた。

たびたび起きる大きな余震に眠れぬ夜を過ごし、翌朝を迎えた。オーナーに状況を聞いてみると、静岡県を中心に相当な被害が発生しているようで、この地域の被害もやはり大きいらしいとのことであった。鉄道は完全にストップし、また高速道路などの交通規制は続いているとのこと。

昼間に避難所に行ってみたが、多くの人が並んでいるのに対し、乾パンと水が少しあるだけのようだ⁷。乾パンと水をもらうのはあきらめて、ペンションに戻った。それにしてもガソリンスタンドも営業していないので、無駄に車で動き回ることもできない。

帰宅するために利用する高速道路などの交通規制が一部解除され、一般車両の通行が可能になったのは、さらにその翌日だった⁸。一部で生じた段差や土砂崩れのため一車線規制になっている道路なども通りつつ、通常の何倍もの時間をかけて、夜も灯の輝くわが街に戻った。

(3) 山間地にいた場合

私たちが住む集落は、富士川の支流に沿って、かなりの距離を登ったところにある。そこで、代々の農業を受け継いできているのだ。平地が少ないため、急傾斜地も畑として利用している。

その日は真夏の暑い日で、昼間には畑仕事を一段落させ、いったん食事をとりに家に戻った。テレビでは、高校野球を中継しており、どちらの高校が勝つかなど、他愛もないことを妻と言い合っていた時だった。

何か地響きのようなものを感じるとともに、地面が揺れているのがわかった。比較的ゆっくりした揺れだが、その割には揺れが大きい感じがする。もしかしたらこれが話に聞いている東海地震ではないかと思った。その時、さらに激しい横揺れが襲ってきた。何をどうすることもできず、食事をとっていたちゃぶ台につかまっていた。家の中の家具は揺れに合わせて、ドンドンと壁に

⁷ 避難所で備蓄されている食糧は基本的に住民の分しか自治体が多いため、観光地では帰宅困難となった観光客への対応が行政・観光企業を含めて問題となりうる。

⁸ 実際に一般車両の高速道路等の利用がいつから可能になるかは一概にいえないが、数日以上を要する可能性も十分に考えられる。

ぶつかっているのが見え、古いこの家の柱がギシギシときしむ音が聞こえる。激しい揺れは何分間も続いたように思え、揺れが終わってしばらくは二人とも呆然としていた。ようやく我に返ってみると、タンスや冷蔵庫、食器棚は倒れ、家の中は足の踏み場もないほど物が散らばっている。先ほどまで見ていたテレビは、台から転げ落ちていた。

「これは大変な地震だ。東海地震に間違いない。」と思った。開きにくくなった玄関を無理やりこじ開け、外に出て周りの様子を見てみた。自分の家は屋根瓦が相当落ちてしまい、外壁も崩れて木がむき出しだが、何とか家は持ちこたえていた。古い農家だが、柱が太いことが幸いしたのかもしれない。しかし、近所の家にはかなり壊れかかっているように見えるものもある。

また、急傾斜地に沿った畑がいくつも崩れ落ちてしまっているのがわかった⁹。今年の収穫はかなり減ることは覚悟しなければならない。

そういえば、ふもとの町で暮らしている長男は無事だろうか。電話を試みるが繋がらない。その頃、同報無線で役場からの情報が伝えられた。やはり相当大きな地震が発生したらしい。火の始末や急傾斜地の崩壊に気をつけるようにとのことであった。まだ役場も具体的な被害状況はつかんでいないようだ。以前に聞いたことがあったが、江戸時代の宝永地震や安政東海地震の際には白鳥山が崩れて富士川を堰き止め土石流が発生したことがあり、また、関東地震の際にも土石流により汽車が流されるなど約 300 人の死者が発生したらしく、地震後には土石流の危険があるので、近くにある危険溪流からは離れるようにしないといけない。

ようやく近所の人たちも外に出てきた。みんな無事かどうかを確かめようと決め、見回る方法を相談していた時、向こうの方で誰かが叫んでいるのが聞こえた。近所の幼なじみである。彼の母が仏壇の下敷きになっているが動かせないという。急いで、その家に駆けつけ、みんなで仏壇を持ち上げ、彼女を引きずり出した。きちんと言葉が出せないが、かなり痛むようだ。腕を骨折しているようではあったので、日頃の防災訓練で学んだ応急処置をとりあえず施した。他にも大きな怪我していたり内臓を痛めていたりする可能性があるため、下の集落にいる医者に電話を試みるが、全く繋がらない。とにかく医者に様子を見てもらい、手術が必要な怪我なら、ふもとの病院で見てもらわないといけない¹⁰。幼なじみは車で母を連れていくことにした。

彼らを見送り、私たちは、近所の家々を見て回った。家々の被害は大きいものもあり、怪我をして血を流している人もいる。しばらく行くと、ペシャンコになった家の周りに人が集まっている。この家に暮らす高齢の夫婦が生き埋めになっていて救助活動を行っていたのだ。私たちの呼びかけに対して、何とか応じる声が聞こえる方に向かって瓦礫を除けていく。1時間ほどして、ようやく二人の姿が見えた。二人ともぐったりしているがしっかりと息をしている。これなら早く治療を受ければ助かるだろう。私たちの集落では毎年防災訓練を実施し、生き埋めになった時の救助方法や消火方法、応急手当方法などを消防職員などから学んできており、いざとなってみ

⁹ 急傾斜地では多くの土砂災害の発生が予想される。全県における急傾斜地崩壊危険箇所約 3 割が崩れる危険性がある。

¹⁰ 特に峡南医療圏、富士北麓医療圏では負傷者の多さに対して十分な医療ができない可能性がある。

るとなかなか難しいものだが、ある程度コツを掴んでいたせいも、なかなかスムーズな活動ができたのではないかと思う。

そうこうしている間に、その頃にはふもとに向かっているはずの幼なじみが戻ってきていた。ふもとに通じる道路が、途中、土砂崩れで塞がれているという。遠回りになる道路も行って見たが、そちらも駄目だったという。車のラジオを聴いたところではやはり東海地震が発生したらしい。

東海地震のような大きな地震だとしたら、こちらから下との連絡を取らないと、我々の集落のことは忘れられているのかもしれない。どうしようかと皆で相談した。自転車を使えば、土砂崩れ箇所を越えて先へ進むことができるかもしれないので、下の集落の消防団までこちらに怪我人がいることを伝えてもらいに行くことにした。

同報無線で伝えられる役場の情報では、各集落の避難先を伝えている。我々の集落は、下の集落にある公民館に避難することになっているらしい。また、NTT 災害用伝言ダイヤル 171 に関する情報が伝えられた。さっそく使ってみると、かなりかかりづらかったが、長男の伝言が既に入っており、無事とのことでほっとした。私たちも無事である旨伝言を入れた。

しばらくすると、自転車で下の集落にいった者が戻ってきた。土砂崩れ箇所は一箇所だけなので、そこまで消防団員が担架を持って待っていているとのこと。急いで、重傷と思われる人々を車に乗せて消防団員との待ち合わせ場所まで連れて行った。消防団員が重傷者を搬送し、重傷者の家族が付き添うのを見送って、我々は集落に戻った。

夕暮れが近づいてきたが停電したままだ。余震も続くため、家の中にいるのは不安で、皆、車の中で寝ることにした。車のラジオでは各地の被災状況などがしきりに伝えられている。広範囲に相当な被害が及んでいるようだった。しかし、この集落の存在が忘れられてしまうのが不安だった。明日はみんなで、あの土砂崩れ箇所をならして、何とか車で下の集落まで行き来できるようにしたいと思った。

(4) 東海地震関連情報が発令された場合¹¹

今日は久しぶりに1泊2日の家族旅行に出かける。県内への小旅行ではあるのだが、息子は昨晩からまるで遠足の前日のように楽しみにしていた。最近仕事が忙しかったから、たまには温泉にでも行くかと思い立ち、綿密に計画を立てていた。

私も少し興奮していたのか、朝早くに目が覚めたので、準備をしながらニュースを見ていた。

¹¹ 平成16年1月5日から、気象庁が発表する東海地震に関する情報体系が見直され、東海地震観測情報、東海地震注意情報、東海地震予知情報の3段階となった。交通信号に例えれば、順に青・黄・赤である。東海地震観測情報は、観測データに異常があるものの、東海地震の前兆現象であると直ちに判断できない場合に発表される情報であり、「日常生活に変わりはないが、テレビ・ラジオ等での次の情報に注意する」段階である。東海地震注意情報は、東海地震の前兆現象である可能性が高まった場合に発表される情報であり、防災体制の準備が進められるとともに、学校等は休校となる段階。東海地震予知情報は、東海地震が発生するおそれがあると認められた場合に発表される情報であり、内閣総理大臣から警戒宣言が発令され、山梨県（一部除く）を含む強化地域内の交通機関が停止したり、百貨店の営業停止、企業の営業停止、医療機関での外来診療の中止などが実施される。

すると、テレビキャスターが慌ただしく臨時ニュースを伝え始めた。

「ただいま、気象庁より東海地震観測情報が発表されました。東海地震に関する観測データに異常が見られたもので、この段階では東海地震の前兆現象とは判断できませんが、以降発表される情報に十分に注意してください。交通機関などは通常どおり運行される予定です。」

私の自宅は東海地震に係る地震防災対策強化地域内にあり、もし東海地震が発生した場合には震度6弱相当の揺れが発生する場所にある。東海地震観測情報はこの段階では東海地震の発生をはっきりと意味するものではないとは言え、今回初めて発表される情報であり、地震への恐怖と不安が頭をよぎった。私は、寝ていた両親と妻、息子を起こし、早めに避難ができるような準備をすることを伝えるとともに、私自身は転倒防止器具等の設定具合の確認など家庭内の地震対策のチェックを行った。この情報の段階では東海地震が必ず起こるとは言えないため、日常生活を送ることは可能ではあるが、万一のためを思って準備だけはしておくことにした。息子は「東海地震が発生するの？どんな揺れになるの？温泉旅行はどうなるの？」と次々と質問してきた。おそらく息子も不安に思っているのだろう。息子だけでなく、私も言葉には出さないものの、内心はかなり不安であった。息子には「旅行には行くつもりだけど、もう少し様子を見ようね。」と伝えた。

私の家は地震対策を一応それなりに進めてきたつもりである。2003年に国の中央防災会議が東海地震に関する被害想定結果を公表して以来、阪神・淡路大震災と同じような被害がこの山梨でも起こるかもしれないとの危機感を持ち、こつこつと対策を進めてきた。2004年には新潟県中越地震が発生し、2005年には山梨県が東海地震に関する独自の被害想定結果を公表するなど、改めて地震への危機感を再認識したところであった。2年前に新築のマイホームを建てたところであり、構造自体は十分に地震に耐えられるものではあると思うが、家具・テレビなどの転倒やガラス飛散などが気になり、最近ホームセンターで転倒防止器具とガラス飛散防止フィルムを買ってきて付けたところであった。また、日頃から夕飯時などに、地震が起こったときの対応や避難場所の確認、連絡方法などについて話していたし、3日間ぐらいは自力で生活できるよう家庭内の備蓄対策を進めるとともに、非常持ち出し袋¹²を準備しておいた。

そうバタバタとしているうちに、テレビ・ラジオのニュースが「東海地震注意情報」を伝え始めた。東海地震の前兆現象である可能性が高まったとのことであり、いよいよ東海地震が現実のものになろうとしていた。私の家は地震対策だけは十分にやってきたつもりではあったが、いざ東海地震が起きるかもしれないという現実には迫られるとなると大きな不安に駆られた。もうこの時点でだいたいの準備はできており、家具や食器棚など地震時に危険なものがない部屋にみんなを集めて、地震が発生した場合の対応について話し合った。息子もやっと地震の「現実」を理解できたのか、旅行の話をしなくなっていた。

¹² 非常持ち出し品としては以下のような最低限のものをすぐに持ち出せる場所に置いておくことが望ましい。貴重品（現金、権利証書、預貯金通帳、印鑑、健康保険証、免許証等）、非常食料（乾パンや缶詰など調理しなくても食べられるものや飲料水）、応急医薬品（傷薬、包帯、鎮痛剤、胃腸薬、持病の薬、生理用品等）、衣類（下着、上着、タオル等）、携帯ラジオ・予備電池、携帯電話、照明器具（懐中電灯・予備電池、ライター等）など

それから2時間が過ぎたころであろうか、気象庁からの東海地震予知情報を受けて内閣総理大臣から警戒宣言が発令された。いよいよ東海地震が起こるのだと感じ、家族みんなが身を寄せ合った。自宅の外では、同報無線が東海地震に備えた準備や冷静な対応等について広報していた。テレビやラジオでは「東海地震の避難対象地区の住民はすぐに避難すること。」「一般車両の利用は差し控えること。強化地域内への一般車両の流入は交通規制などにより制限されること。強化地域内の鉄道は運休となり走っていた列車は最寄りの駅に停車していること。金融機関や百貨店などは営業停止となっていること。」「東海地震が起こった場合の被害がどうなり、対応としてはどうすればよいか。」などが繰り返し伝えられていた。

そして半日近くが経過した夕方、東海地震が発生した。激しい揺れに見舞われて立っていることができないほどであったが、東海地震に対する事前準備をしていたこともあり、結果的に私の家には大きな被害はなく、怪我人が出ることもなかった。静岡県を中心に多くの被害が発生したようだが、地震が事前に予知できたおかげか、人的被害は大きく軽減された模様と伝えられた。

冷静さを失っていたせいなのか、バタバタしていたせいなのか、今になってやっと、関西に住む妻の両親のことが気になり、電話連絡をしようと思ったのだが、電話は輻輳して既にかかりにくくなっていた。全国からあるいは全国への安否確認などの電話が殺到しているのであろう。妻はNTT 災害用伝言ダイヤル 171 をダイヤルし、「無事であること」「当面は自宅で生活できること」を吹き込んだ。